大学サークル訪問

兵庫県立大学
環境を考える会“ ゆりのき ”

http://www.shse.u-hyogo.ac.jp/yurinoki/

少人数だからこそ団結力には自信

「環境を考える会“ ゆりのき ”」は、1998年、姫路工業大学環境人間学部設置をきっかけに、環境について学生が自主的に勉強し活動しようという趣旨のもと発足した（2004年、姫路工業大学、神戸商科大学、兵庫県立看護大学が統合して兵庫県立大学が誕生）。会の名称は、環境人間学部がある新在家キャンパスのシンボル的な木として親しまれる「ユリノキ」に由来している。

現在のメンバーは、12月の3回生引退を受け、1・2回生のみの6人と少々寂しい。「少人数だからこそ、全員でひとつの目標に向かって活動できる」と、6代目の代表・藤原敬志君は語るが、1回生がたった1人という現状においては、この春の新人獲得は、会存続のためにも絶対条件。3月に行なわれる主催イベント「リユース市（卒業生が不要になった家電家具などを新入生に安く提供する）」を中心に、勧誘活動強化が目下の課題とのことだ。

6代目代表の藤原君。

小学生向け環境日記制作で受賞

昨年開催された「中播磨こども環境会議」で寸劇を披露。

会の主な活動は、その「リユース市」の他、学園祭でのエコ・イベント（エコ学園祭）、キャンパス内のゴミの現状を把握する「ゴミプロジェクト（ゴミ調査）」といった、いわゆる“ キャンパス・エコロジー活動 ”が中心。背伸びをせずに、自分たちの足元にある環境問題に取り組んでいこうという姿勢がよくわかる。

そんな“ ゆりのき ”が、兵庫県中播磨県民局に協力という形で、一昨年からスタートさせた活動に、環境日記の制作がある。これは地域の小学4～6年生を対象にした夏休み期間の環境家計簿で、学生ならではの柔軟な発想を活かし、ゲーム感覚で楽しみながら環境への意識や知識を高められるつくりとなっている。現在の活動の中でも中心的な位置を占め、昨年はこの活動により、「大気保全活動功労者への環境管理局長表彰」を受賞した。

「一昨年の製作活動の反省点を踏まえ、昨年はより親しみやすく充実した内容のものができました」（藤原代表）。今年の課題は、さらによいものを目指してアイディアを出し合うことはもちろん、各校への説明会など、子どもたちと直接する交流する機会を増やしていきたいということだと言う。大学生と行政と子どもたちが、それぞれの立場でできる活動を通して手を組み、地域の環境活動を盛り上げていく。今はまだ小規模のサークルだが、その行く手には理想とするビジョンが見え始めているようだ。

小学生向けの環境日記。「環境クロスワード」や、マスを埋めると絵が出てくる「行動チェックシート」など、楽しい企画がいっぱい。

環境管理局長表彰の楯。

▶ 子どもへの環境教育、そして子から親へ ～兵庫県中播磨県民局レポート～ ◀

“ ゆりのき ”の活動拠点である兵庫県立大学新在家キャンパスは、兵庫県の南西部、姫路市を中心とする1市7町からなる中播磨地域にある。この地域を担当する県の地方機関である中播磨県民局では、地球温暖化問題に対する地方行政としての取り組みとして、「地球規模で考え、地域から行動を」の理念のもと、「中播磨地域におけるグリーンエネルギー普及促進の基本方針」を平成14年度に策定し、省エネルギー対策の実施、新エネルギーの導入の促進に向かって様々な事業を行っている。そうした活動の中でも重視されているのが、これからの世代を担う若い親子への施策で、小学生向けの「環境日記」の制作も、その具体的な方法として企画された。

「私たちが考えると、どうしても堅苦しいものができてしまう。そこで、大学生の柔らかな発想を借りて、親しみやすく楽しいつくりにしようということで、“ ゆりのき ”の皆さんや現場の先生方の協力をお願いしたわけです」（中播磨県民局県民生活部環境課長・平田智昭さん）

中播磨県民局県民生活部環境課の平田課長（右）と村場さん（左）。

楽しみながら環境問題への意識を養えるこの冊子の評判は上々で、一昨年には11校、昨年は24校の小学校の参加を得た。また、これによって収集された各家庭の電気・ガス・水道の消費量、飲料系ゴミの排出量とそれらから割り出されるCO_2の排出量のデータも、“ ゆりのき ”の協力を得て集計され、提出した子どもたちにフィードバックされている。

こうした活動を積み重ねることによって、地域住民一人ひとりの環境への意識を高め、住民、事業者、行政が一体となった環境施策を実現させていきたいと中播磨県民局では考えている。